

『職業訓練』1964年11月(労務労政研究所)

職業訓練と視聴覚

国立教育研究所研究室長 矢口 新

教育や訓練に視聴覚教材を利用することの意義は随分強調されているが、それでもなかなか普及しないのが現状である。それはどういうわけだろうか。

視聴覚教材を利用するのがよい方法だということは、誰もがわかっているといってよいであろう。それならどうしてそれを利用することにならないのであろうか。それはいろいろな条件があげられる。例えばそういう教材を利用するには金がかかるとか、そういう教材を準備するのに手間がかかるとか、そういったことがあげられる。それを使えばよりベターであるが、つい費用の点とか手間の点で次善のことでがまんしなければならないという人々が多い。

こういう言い方は、実は視聴覚教材の必要性が本当にわかっていないのである。視聴覚教材はよりベターな教材ではなくて、必要欠くべからざるものであるのだが、それがどうしてもわからないのである。それは根本的に言うに教育とか、訓練とかについての考え方がまちがっているからである。視聴覚教材なしで、次善の策として、教師が説明してやればそれでわからせることができるというように考えているからである。あるにこしたことはないが、なくても教師が努力すればできるという錯覚があるのである。

この教育や訓練についての考え方、教育は教師という人間の働きに非常に重要な意味があるということ、そしてその教師が一生懸命やればわからせることができるということ、この二つのことが大きな間違いのもとである。

教育や訓練は教師の問題ではない。生徒がどれだけ、頭を働かし、身体を働かすかということである。いくら教師が一生懸命になっても、いな一生懸命になればなる程、生徒の方はボンヤリして、頭を働かさないことがある。生徒を働かす、生徒の頭脳をフルに訓練するにはどうしたらよいかということは、教師が一生懸命にやることとは別に考えられなければならない。生徒の頭を働かし、頭脳を訓練するには、さまざまな道具が必要であり、工夫がなくてはならない。

もう一つの間違ひは、教育や訓練のねらいは、わかるということではないということである。教師が説明して、わかったか、おぼえておけなどということは、教育や訓練になっていないのである。それは生徒にとっては、わかったような気がするだけで、ひとつも身につかないといってよい。教育されるということは、わかったような気がするということだけでなく、教師が考えたとおなじように考えることができる状態になることである。教師の話がわかるのでなく、教師なしで、一人でそう考えることができるということである。技術について考えれば一層はっきりする。自分一人でやれる段階になって、はじめて教育の効果があつたことになる。

教育はだから生徒に自分で考えさせ、やらせることであり、そうさせるように学習の場をつくることである。そう考えると視聴覚教材は絶対に必要なのである。その点の自覚が日本では非常に足りない。